

# おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

## プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）  
東京で大学・研究室生活を経てリターン  
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビュアーの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる  
心理学・新潟学等講師、経営学修士（MBA）  
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）  
「おもしろ えちご塾」（恒文社）等

## 「佐渡むじな」

最初に御断りしておきます。どうか、佐渡の人および関係者は、以下を読んでご立腹なさいませんように。これも、新潟に関する、生物・習俗・民族・郷土史に関わる学術的問題追及のためです。心温かき読者の皆様のご理解・ご協力をお願いして、話をすすめます。

以上 筆者敬白

ということで、早速本題に入ります。

新潟には「佐渡むじな」（貉）という生き物がいて、これが転じて佐渡の人を、秘かに秘かに本土（県内）の人が称していたというのです。今でも、「彼は佐渡むじなだからね」という声を耳にします。あっ、決して差別的な意味ではないので怒らないでください。しかし、なんとなく、「佐渡の人の抜け目なさ」や「島国から出て大成する人の多かった佐渡の人の勤勉さ」を称して本土で口にしていたようなニュアンスがあります。

もともと、ムジナは、全国的には「アナグマ」を指しますが、佐渡ではタヌキ（本土タヌキ）を指し、本来のアナグマは佐渡には生息していないのです。ですから、「佐渡むじな」は方言で、共通語では、「本土タヌキ」のこと（主に東日本は、「ムジナ」西は「タヌキ」と称しているようです）。

この本土タヌキをはじめ、佐渡には、「本土テン」や「本土イタチ」が生息しています。「本土」というからには、海を渡って佐渡に持ち込まれた「島外もの」です。このため、島外の異質なものを、佐渡では人を化かすとされる「ムジナ」と称していたのかもしれませんが。

では、なぜ「佐渡むじな」なるタヌキが佐渡に持ちこまれたか？それは、なんと佐渡金山で栄えた江戸時代に遡ります。採掘した金を錬金する工程作業

で使用する「ふいご」、この道具の材料がタヌキの革でした。このため、ゴールドラッシュに沸きたつほど、本来佐渡には生息しなかったタヌキが必要になり、ネズミ算ならぬタヌキ算で繁殖して野生化したといえます。

今も昔も、純金とくれば目の色が変わる人も多いうえ、金の採掘と錬金は、幕府の一大事業でしたから、さまざまな人間模様や念が渦巻いていたことでしょう。金の採掘は、たぬき掘りともいわれていて、佐渡金山にはタヌキやムジナがつきものです（ついでに、タヌキやムジナ相手の女狐もいたはず）。考えてみれば「狸親父」や「狸と狐の化かしあい」「一つ穴の貉」等どこことなく油断のならない人のたとえで「タヌキ」も「ムジナ」も使われています。さぞや、本物のタヌキとムジナには迷惑なことでしょうが、金山に関わる人々（管理する御上はじめ、山師の面々）は「タヌキ」や「ムジナ」の要素が必要だったとも思われます。

それがやがて本土では、勤勉で働き者で結束力の強い佐渡出身者を「佐渡むじな」と称するようになったのでしょう。県内の民話には、本土では「佐渡むじな」が小賢しい象徴に描かれているのに対して、佐渡では面倒見の良い親分肌を描かれているのも、本土と佐渡の「ムジナ」に対する評価が分かれておもしろいと思います（この民話については別の機会に触れたいと思います）。

さてさて、あなたのムジナ評はいかがでしょう。私はこの件につきまして、もちろん狸寝入りをきめこむことにいたします、コホン。

